〔別紙２〕

審査の結果の要旨

氏名　八巻　知香子

本研究は、1)障害のある人に対して、社会がどのような圧力を注いでいるのかについて、新しい「まなざし」の概念を用いて把握すること、2)障害当事者の主体性やポジティブサイコロジーに着眼し、障害への対処と主観的ウェルビーイングの状態とその状態を左右する要因を明らかにすることを通じて、現在の日本社会において是正を必要とする価値観や態度を指摘した。主たる結果は以下の通りである。

1．質的調査におけるインフォーマントたちは、「自立への意欲がありながら機会が開かれないこと」「所属集団からの排除・蔑視」「公共の場所での排除・蔑視」を通じて、否定的な「障害者への社会のまなざし」を感じ取っていた。これらは障害者が感じ取る否定的な「障害者への社会のまなざし」は、明白な差別としては捉えにくい日常の空気のようなものを含めた総体として感じ取られていた。一方、肯定的な「社会のまなざし」を感じる経験についての言及は極めて少なく、挙げられた事象は、否定的な「社会のまなざし」の要素がないこと、または低減していることを指摘するものであった。

2．個々の否定的なまなざしにについて、現在の日本に「ある」と答えた人の割合は、1項目を除いていずれも過半数を超え、従来欧米で指摘されてきた「障害者役割」に合致するような障害者観が存在することが明らかになった。一方、肯定的な「まなざし」についても、70%以上の人が「ある」と答えた。否定的な要素についても、肯定的な要素についても存在を感じている人は非常に多く、否定的な要素については是正を、肯定的な要素については広がりを望んでいることが確認された。

3．「障害者への社会のまなざし」の肯定的評価傾向は、対人的な被差別経験および移動・情報入手の不便よる日常の不快な経験の多寡と強く関連していたが、障害の状態や社会関係による説明力は極めて小さかった。このことから日常生活の実感に基づくものと考えられた。また、これらの「障害者への社会のまなざし」の認知は、市民への調

査でもほぼ同値を示し、障害者だけが感じている事象ではなく、障害のない人にも感じ取られている事象であると考えられた。以上より、本研究で用いた尺度は、社会の状態をモニターする手段として有効であると考えられた。

4．積極的な対処については様々な角度にわたって広く用いられていたが、消極的な対処スタイルをとる人は極めて少なかった。ホープを測定する HHI 得点の平均値は一般住民とほぼ同値の 34.6 点、82%の人が自分の生活の質を「普通」以上であると答え、高い主観的ウェルビーイングを保持している人が多数存在していることが示された。本研究の対象者においては積極的な対処スタイルが広く採られていることにより、主観的ウェルビーイングが高く維持されていると考えられた。

5．積極的な対処スタイルと対人的被差別経験、「障害者への社会のまなざし」の肯定的評価とは視覚障害者においてのみ関連がみられ、肢体不自由者、聴覚障害者では関連が見られなかった。しかし、対人的被差別経験、「障害者への社会のまなざし」の肯定的評価傾向は、ウェルビーイング指標との関連が認められた。よって「障害者への社会のまなざし」や対人的な被差別経験は、必ずしも積極的な対処スタイルを抑制するものではなかったが、主観的ウェルビーイングに負の影響を持つものと考えられた。

6．積極的な対処スタイルに関連する要因は、社会的役割・社会関係を広くもつことと正の関連を示した。また、二つの主観的ウェルビーイング指標に関連する要因は、社会的役割・社会関係を広くもつことと強い正の関連があり、積極的な対処スタイルは最も大きな説明要因であった。このことから障害への積極的な対処スタイルを促進する上でも、主観的ウェルビーイングを高く保つ上でも、社会的役割や社会関係の充実は非常に重要であることが示唆された。

以上、本論文は社会がどのような圧力を注いでいるのかについて、新しい「まなざし」の概念を用いて把握した。同時に障害当事者の主体性やポジティブサイコロジーに着眼し、障害への対処と主観的ウェルビーイングの状態とその状態を左右する要因を明らかにした。本研究はこれまで行われてきたスティグマ論を主流とする障害者研究とは異なる枠組みを採用することにより、流布してきたステレオタイプに囚われない障害者理解に貢献すると実証研究であると考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。